優しさを誇らしさに 土屋

高浜代表著作『異端の福祉』出版

重度障害や難病があっても“自宅で暮らす”を当たり前の選択にするために重度訪問介護サービスの全国展開に挑んだある社会起業家の軌跡

もう読みました？土屋のDNA本

「福祉は清貧であれ」の業界でタブーに挑む

2023年5月発行

本の厚みに躊躇していませんか？

安心してください。読みやすい構成でどんどん惹き込まれますヨ

第1章 重度障害者の介護へ 目の当たりにした過酷な現実

たまたま手にした求人誌。そこに載っていた障害当事者が運営する事業所で高浜代表は介護を学ぶことになりました。そこで、重度障害者の厳しい現実を知ることとなります。ある日、代表からクライアントから理不尽なことを言われたとき、どう対応しているかと質問された高浜代表は「適当に受け流しています」と答えたそうです。クライアントとぶつからないために、そして飛んでくる言葉の刃から自身の心を守るために最もよい処世術だと思っていたからこその言葉でした。

「障害者には社会経験の機会を奪われてきた人も多く、関係を築くのが苦手な人もいる。介助の現場は他者との関係を学ぶ大切な場所学びあうため私たちは一緒にいるのだから、言われたことをロボットみたいにやるだけの介助者にはなってほしくない。ともに在り、ともに幸せをつくっていく場なのだから」事業所の代表の心からの言葉を受け、本音で向き合うことを心掛けるようになったところそれに呼応するように心を許してくれるクライアントも少しずつ増えていくのでした。そこから障害の本音や過酷な現実を目の当たりにしていくのです。

第2章 国の制度ができてもサービスが受けられない 働き手不足の重度訪問介護

ボランティアが重度障害者の在宅介護を支えた時代がありました。障害者たちが地域で暮らす例が1970年代前半から少しずつ見られるようになりました。が、それはごく一部の障害者に限られていました。要因の一つは、重度障害者が安心して暮らせるようなバリアフリー住宅が当時ほとんどありませんでした。ボランティアから労働へ障害者自立生活運動が活発化していく中、高浜代表は全国公的介護保障要求者組合のメンバーとして活動のど真ん中にいました。

障害者運動のほか、労働運動やホームレス支援などにも積極的に参加し邁進していきます。労力のかかる仕事でもそこからの報酬が得られないため、アルバイトを複数掛け持ちして生活をなんとかやりくりする生活。精神的・肉体的ストレスからアルコール依存の状態に陥っていった結果、体を完全に壊してしまい、生活保護を受けることになりました。そこからまた復活を遂げていく雄姿は必見です。

第3章 誰もやらないなら自分でやるしかない 重度障害者が自宅で過ごせる介護事業を立ち上げる

2020年8月重度訪問介護事業で会社設立しました。この事業でいちばん大事なことは一瞬でもクライアントを介護難民にしないということ多くの人の人生を背負う重圧を感じながらも前に進んでいきます。他の人がやらないなら私がやるという気持ちで、全身全霊で事業に取り組み、重度訪問介護を取り巻く社会課題を解決するための日々が始まります。

介護の利用で人生が変わる【当事者とその家族のエピソード】には、重度訪問介護がいかに重要なサービスであるか、当事者と身内ならではのリアルな本音がつづられています。

第4章 利益の出る仕組みをつくり、従業員には高い給料を支払うことでサービス品質を高める 『福祉は清貧であれ』という業界の常識を覆す

高浜代表がこの会社でやろうとしていることは大きく二つあります

「介護難民を支援する」という社会課題解決への道筋

全国に事業所を構え、重度訪問介護サービスを必要としている人に隈なく届けること

福祉を夢のある仕事にする

会社を大きくすることで介護職の待遇アップを図り、福祉を夢のある仕事にすること

営利企業にすることで「支援できる人が増える」スケールメリット（事業の規模拡大に伴って生まれる効果）が狙えます。営利事業にこだわる最大の理由は、その方がより多くの重度障害者を支援できるからです

現在、多様なバックグランドをもつ人たちが活躍しています。自社で働く6人の社員それぞれのエピソードを自分に重ねて読むことをおすすめします。大事なのは学歴や職歴ではなく、人となりやモチベーションがこの仕事では大事だということを強く感じられる事と思います

第5章 会社を成長させることが社会課題を解決する 必要な人が必要な介護を受けられる社会を目指して

生きられるにもかかわらず、ALS患者の7割は人工呼吸器の装着を拒否します。その大きな理由の一つに、延命することで家族に介護の負担がかかることを避けたいという切実な思いをあげる方が多いそうです。重度訪問介護が受けられることになって、家族の介護負担が劇的に軽減し、やっぱり人工呼吸器を装着したい生き続けたいと考えられるケースをたくさん見てきた高浜代表が伝えたい思いをこの本を通して感じる事が出来る事でしょう

編集後記

プロローグでは福祉業界で20年、高浜代表が歩いてきた道のりが赤裸々に描かれています。プロボクサーを目指した日々、大学入学後中退そして再入学、アルバイト生活をしながら自分探しを続けていた彼は、一冊の本をきっかけに介護の道へと進みます。この本は自分が、もし道に迷ったときにまた手に取りたい本です。まだ読んでいない方が少しでも興味を持って下されば幸いです。 byペーパー社員